



きょうりゅう はなし  
恐竜たちの お話

なん  
「何てこった、ミルトン！」

ある 日曜日<sup>にちようび</sup>の 午後<sup>ごご</sup>のこと。トリストンは  
リビングルームで、レゴの 列車<sup>れっしゃ</sup>を  
組み立て<sup>くみた</sup>てていました。線路<sup>せんろ</sup>やバラバラの  
レゴが 部屋<sup>へや</sup>中に 散らか<sup>ち</sup>っています。

「おやまあ！ 2階<sup>にかい</sup>に いると 思<sup>おも</sup>って、  
さがして いたよ。」 散らか<sup>ち</sup>ったレゴを  
よけながら つま先立ち<sup>さきだ</sup>で 部屋<sup>へや</sup>に 入<sup>はい</sup>って 来<sup>き</sup>た  
ジェイクおじいちゃん<sup>い</sup>が 言<sup>い</sup>いました。

「遊ぼう<sup>あそ</sup>と 思<sup>おも</sup>って 下<sup>した</sup>に 来<sup>き</sup>たんだ。ぼくの  
部屋<sup>へや</sup>は 遊ぶ<sup>あそ</sup> 場所<sup>ばしょ</sup>が なくて。」と、トリストン。

「そりゃ、ごも<sup>へや</sup>つともだ。部屋中<sup>やじゅう</sup>  
散らか<sup>ち</sup>っていて、ドア<sup>あ</sup>を 開<sup>あ</sup>けるのさえ、  
大変<sup>たいへん</sup>だったぞ！」と、ジェイクおじいちゃん。

「お母<sup>かあ</sup>さんが 後<sup>あと</sup>で 片<sup>かたづ</sup>付けて くれるよ。  
片<sup>かたづ</sup>付けが 好<sup>す</sup>きなんだと 思<sup>おも</sup>う。」と  
トリストン<sup>い</sup>が 言<sup>い</sup>いました。

「本当<sup>ほんとう</sup>は、おまえ<sup>ち</sup>が 散<sup>ち</sup>らかした 後<sup>あと</sup>を  
片<sup>かたづ</sup>付けるのは、お母<sup>かあ</sup>さんにとつて  
大変<sup>たいへん</sup>なんだぞ、トリストン。責任<sup>せきにん</sup>を 持<sup>も</sup>って  
後<sup>あと</sup>片<sup>かたづ</sup>付けを する<sup>せいちよう</sup>のも、成長<sup>せいちょう</sup>の しるしなんだよ。」



トリストンは、首を横にふってため息をつきました。  
「ぼく、片付けは好きじゃないよ。すごく時間がかかるんだもの！」

「だからこそ、散らかしっ放しにしないで、その都度片付ける  
くせを付けることが大切なんだ。そうすれば、あまりにも  
たくさんのものを1度に片付けなくてすむからね。」

「だけど、どうして片付けることが大切なの、  
おじいちゃん？」と、トリストン。

「それはいい質問だね。責任を持って、きちんと片付けるのが  
大切なことを理解するのに役立つお話をしなさいよ。」

トリストンはお話を聞こうと、早速ソファの上へ上がりました。

「まずは、レゴを片付けたらどうだい？」と、  
ジェイクおじいちゃんが言いました。

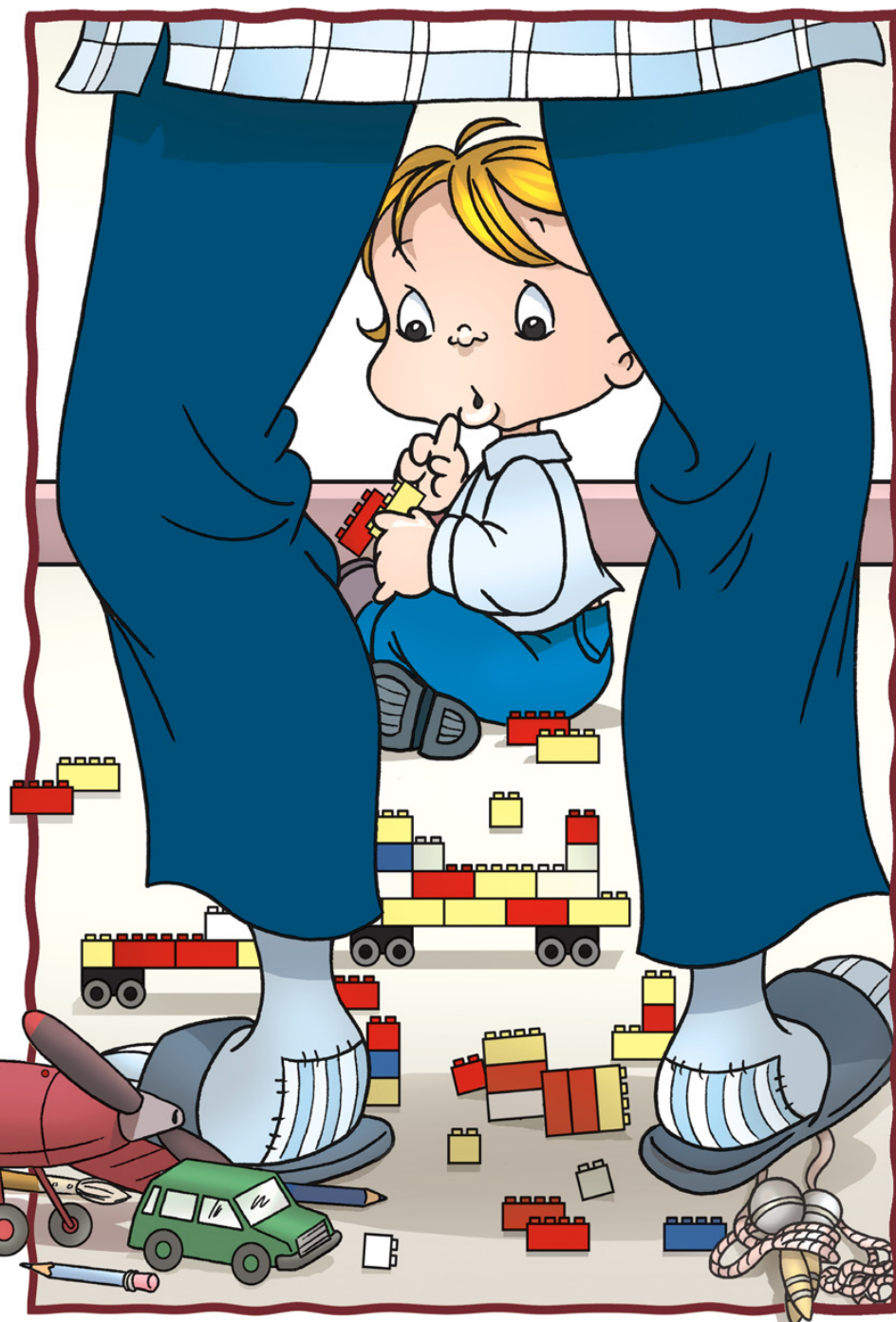
「分かったよ。その後、お話をしてくれる？」と、トリストン。

「もちろんだとも！」



ナギン先生がおおきな箱を学校に持って  
きました。「みんな、おはよう。」そう  
言って、ナギン先生は箱を机に置きました。

「おはようございます、ナギン先生。」と、  
みんなが言いました。



「みんな、いい週末を過ごせたかな。」

「は〜い。」と、恐竜たちが答えました。

「ナギン先生、その箱は何ですか？」と、  
ディクシーがたずねました。

「今日は、サプライズがあります。今週は、責任を  
持つことや良いマナー、身だしなみをきちんとし、  
整理整頓することに重点的に取り組めます。  
そのための表を、みんなのご両親に配ってあるので、  
自分の仕事を責任を持ってやったり、マナーが  
良かったり、身だしなみをきちんとしたら、その都度、  
表に印を付けてもらえます。今週末に、印が一番  
多かった3頭の恐竜には、賞品があります。」

ナギン先生は箱を開けて、小さな  
ドームテントが入った袋を取り出しました。  
次に、イーゼルとパレットがセットに  
なった絵画キットを取り出しました。  
最後に取り出したのは、小さなワゴンの  
組み立てキットです。

ワゴンを見ると、ミルトンの目が  
かがやきました。ずっと、ワゴンが  
欲しいと思っていたのです。



授業が 始まりましたが、ミルトンはワゴンのことで  
頭が いっぱいです。賞品の ことばかりが 気になって、  
賞品を もらうために 何を しなければ ならないか、  
ナギン先生の 言った ことなど、気にも とめて  
いませんでした。

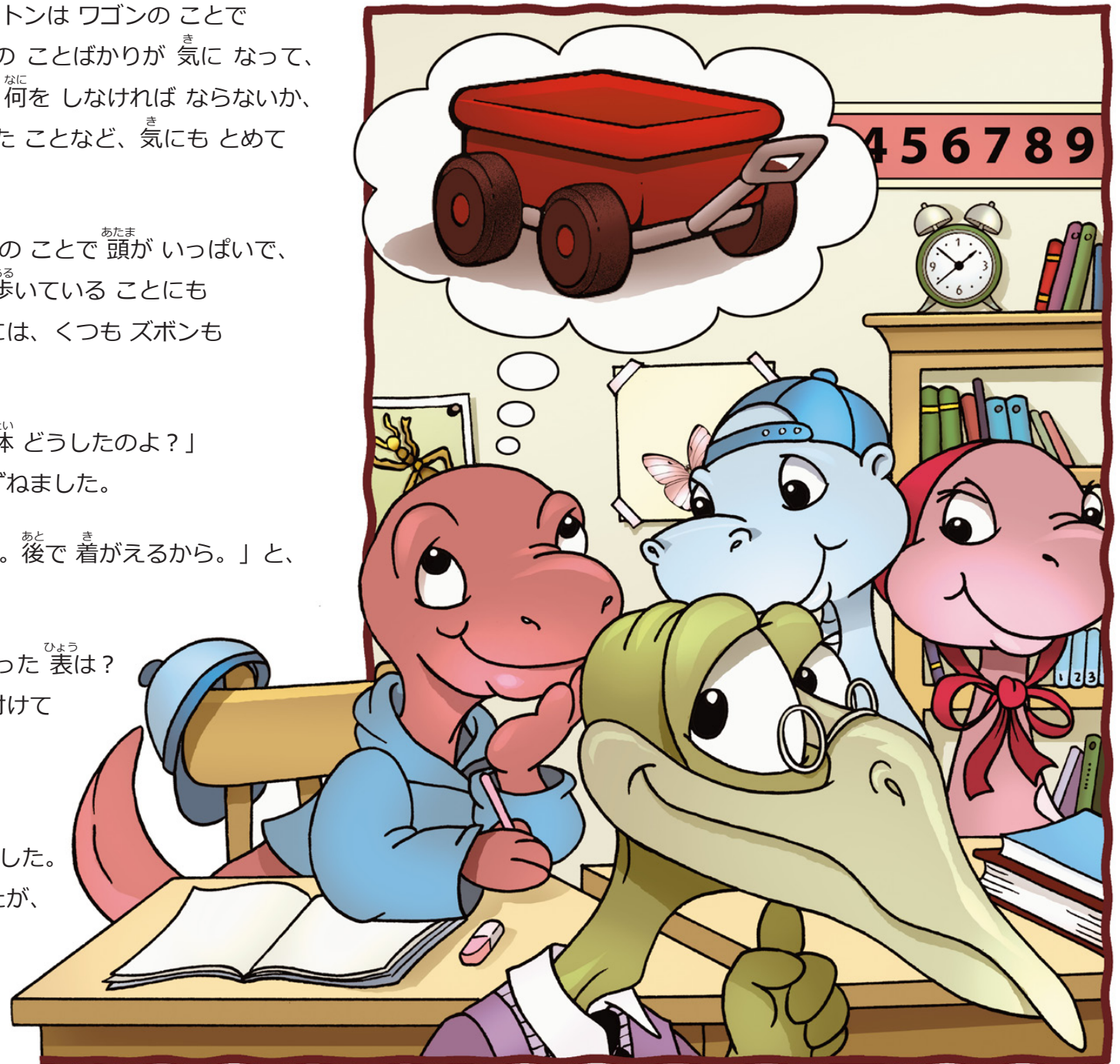
下校中も、ミルトンはワゴンのことで頭が いっぱいで、  
どろだらけの 水たまりの 中を 歩いている ことにも  
気付きません。家に 着いた 時には、くつもズボンも  
完全に だろまみれでした。

「まあ、ミルトンったら。一体 どうしたのよ？」  
巣穴に 帰ると、お母さんが たずねました。

「ただの だろだよ、お母さん。後で 着がえるから。」と、  
ミルトン。

「でも、ナギン先生から もらった 表は？  
すぐに 着がえないなら、印は 付けて  
あげられないわよ。」

「分かったよ。」 ため息を  
つきながら、ミルトンが 答えました。  
すぐにズボンは はきかえましたが、  
くつの だろを きちんと ぬぐい  
と 取らなかったの で、巣穴の  
中は だろの 足あとだらけに  
なっていました。



ゆうがた  
夕方になると、お父さんが帰って来ました。

「ただいま。」と、お父さん。

「お帰りなさい。」と、ミルトンのお母さんは  
言いましたが、ミルトンはだまったままです。  
ミルトンは、おもちゃに夢中でした。

ミルトンのお父さんは、お気に入りのいすに  
こしかけました。ところが、すわったとたん、  
ひめい  
悲鳴を上げました。「いてて！」

「まあ、どうしたの？」と、ミルトンのお母さんが  
たずねました。

「いすの上に何かあるぞ。」と、お父さん。

いすには、ミルトンが遊んでいたジャックスが  
いくつか放りっ放しのままでした。ミルトンの  
お母さんは、悲しそうに首をふりました。

1週間がたっても、ミルトンは服をよごさずに  
いることができない様子でした。おもちゃの  
トラックをどろだらけの地面で走らせ、  
その後もきれいにしなかったために車輪が  
どろで固まり、回らなくなっていました。  
ミルトンの部屋も散らかりっ放しで、そこら中に  
おもちゃが転がっていました。家の仕事もちゃんと  
やっていません。



「<sup>なん</sup>何てこった、ミルトン！」<sup>しゅうあ</sup>週が明けて、ミルトンが  
学校に<sup>がっこう</sup>着くと、ナギン先生が<sup>せんせい</sup>声を<sup>こえ</sup>上げました。

ミルトンの<sup>がっこう</sup>かっこうはめちゃくちゃでした。  
登校中に<sup>どうこうちゅう</sup>チョウを<sup>お</sup>追いかけているうちに、  
ズボンが<sup>ひ</sup>さくに引っかかったのでやぶれていました。  
どろの<sup>みず</sup>水たまりの中を<sup>な</sup>走ったために服は<sup>はし</sup>びしょぬれで、  
学校にも<sup>がっこう</sup>遅刻してしまいました。着いたのは、すでに  
ナギン先生が<sup>せんせい</sup>賞品を<sup>しょうひん</sup>配った<sup>くぼ</sup>後<sup>あと</sup>でした。ウェズリーが  
ドーム型<sup>がた</sup>テントを<sup>がた</sup>もらい、サッズが<sup>かいが</sup>絵画セット、  
バンブルが<sup>がた</sup>ワゴンを<sup>がた</sup>もらいました。

ミルトンは<sup>かな</sup>悲しそうに<sup>とき</sup>うつむきました。その時<sup>とき</sup>やっと、  
自分の<sup>じぶん</sup>服<sup>ふく</sup>が<sup>な</sup>どんなに<sup>な</sup>どろだらけで、おまけに<sup>な</sup>やぶれて  
いるかに<sup>き</sup>気が<sup>つ</sup>付きました。

「ごめんなさい、ナギン先生<sup>せんせい</sup>。ぼく、ワゴンが  
すごく<sup>ほ</sup>欲しかったんですけど、身だしなみを<sup>み</sup>きちんと  
することや、良い<sup>よ</sup>マナーについて、まだまだ  
学<sup>まな</sup>ぶ<sup>ふつよう</sup>必要<sup>ひつよう</sup>がありそうです。」

ミルトンは<sup>すこ</sup>少し<sup>かな</sup>悲しい<sup>きもち</sup>気持ちで  
下校<sup>げこう</sup>しました。

「今日は、<sup>きょう</sup>賞品<sup>しょうひん</sup>が<sup>もらえな</sup>もらえな  
かったんだ。」と、ミルトンが  
お母<sup>かあ</sup>さんに<sup>い</sup>言いました。



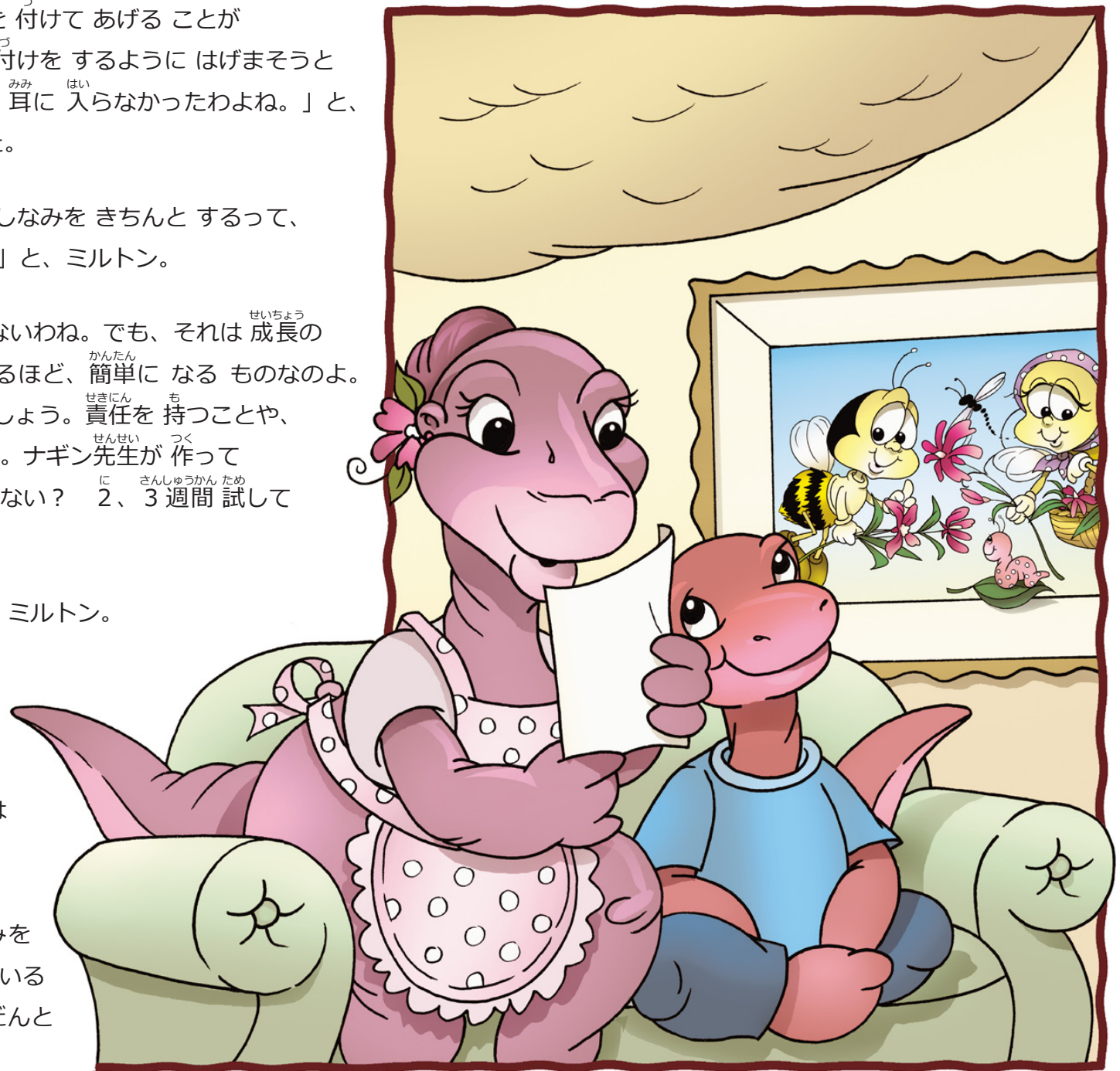
「そうね、ミルトン。表に<sup>ひょう しるし つ</sup>印を付けてあげることが  
できなかったもの。<sup>あとかたづ</sup>後片付けをするように はげまそうと  
したけれど、ちっとも<sup>みみ はい</sup>耳に入らなかったわよね。」と、  
<sup>かあ い</sup>お母さんが言いました。

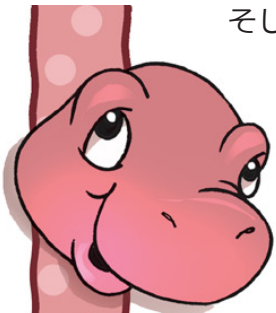
「お母さん。<sup>み</sup>身だしなみをきちんとするって、  
<sup>たいへん</sup>すごく大変なんだ！」と、ミルトン。

「そうかもしれないわね。でも、それは<sup>せいちょう</sup>成長の  
<sup>いちぶ</sup>一部なの。やればやるほど、<sup>かんたん</sup>簡単になるものなのよ。  
<sup>いの かみさま たす</sup>祈って、神様に助けてもらいましょう。<sup>せきにん も</sup>責任を持つことや、  
よいマナーが<sup>み</sup>身につくようにね。ナギン先生が<sup>つく</sup>作って  
くれた<sup>ひょう</sup>表を、また<sup>に</sup>がんばってみない？ <sup>さんしゅうかん ため</sup>2、3週間試して  
みるのはどう？」

「うん、やってみるよ！」と、ミルトン。

<sup>つぎ に さんしゅうかん</sup>次の2、3週間、ミルトン  
<sup>いっしょう めい み</sup>は一生けん命、身だしなみを  
きちんとし、<sup>せいり せい</sup>整理整とんを  
する<sup>ところ</sup>ように心がけました。<sup>さいしょ</sup>最初は  
<sup>たいへん</sup>大変でしたが、<sup>じぶん</sup>自分のやるべき  
<sup>いえ しごと</sup>家の仕事をちゃんとやったり、  
<sup>あとかたづ</sup>後片付けをしたり、<sup>み</sup>身だしなみを  
<sup>ととの</sup>整えたりするようにがんばっている  
うちに、それらのことは、だんだんと  
ラクになっていきました。





そして、ある日の夕方、お父さんが、バンブルが  
もらったのと同じようなワゴンを持って帰りました。  
自分のやるべき家の仕事をきちんとやり、良い  
マナーを心がけていたごほうびに、ミルトンに  
プレゼントしたのです。

ミルトンは、大喜びでした！ その後、どうなったと  
おもいますか？ それ以来、ミルトンはいつも、身だしなみが  
きちんとしていてマナーの良い、きちんと整理整頓する  
子だということで、みんなに知られるようになったのです。



「ぼくも、きちんとして整理整頓できるように  
がんばるよ、おじいちゃん。」と、トリスタンが言いました。

「それは素晴らしい！ きっと、お母さんも、  
ものすごく喜んでくれるよ。」と、  
ジェイクおじいちゃんが言いました。

「2階に行って、部屋を  
片付けるね。お母さんが  
帰って来たら、ぼくの  
部屋がきちんと片付いて  
いるのを見て、すごく  
おどろくよ。」トリスタンが  
はりきって言いました。



きょうくん せきにん おこな  
**教訓**：責任ある行いをしていると、周りの人たちは、  
きみ 物のたいせつ ひと  
君が物を大切にすると分かれ、安心して何かを  
まかせられるって思ってくれるようになるんだよ。